



宮田喜代藏博士の学問 : 生活経済学と平価切下論 (宮田喜代藏博士記念號)

新野, 幸次郎

(Citation)

国民経済雑誌, 99(6):81-100

(Issue Date)

1959-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/80040701>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80040701>



宮田喜代藏博士の学問

——生活経済学と平価切下論——

新野幸次郎

I

昭和三四年二月のある日のことだつた。神戸大学六甲台学舎二〇六号教室は、試験前の最後の講義を聞く学生で一杯だつた。教室の両わきとうしろにさえも、立ちんぼうのまま、熱心にノートを拵げ、教授を見つめる少くとも三、四〇人の制服の人がいた。時々、写真を写す人もいる。私は最後列の立ちんぼの中にまじつて、学生時代から数えると十二年間にわたつて、本当に慈父のように教えをうけてきたこの教授のいつもかわらぬ名講義を聞いていた。黒板には、特徴のある書き方で、政治・経済・技術と云つた言葉が書きこまれ、黒板の上段には、コンドラチエフ波動とホフマン係数をグラフ表示したものが二枚貼つてあつた。いよいよ、昭和一六年以来神戸大学での一八年間にわたる講義の最後の時間がやつてきた。今迄恐らく一度も、講義時間中に講義外のことに言及されることのない教授は、気のせいかな、私の方を一寸見て、はにかみの情を示し乍ら、「私の神戸大学での生活の最後に當つて、私の好きな一つのことばをおくりたいと思ひます」と云つて、黒板に向かれた。そこには、『ファウスト』天上の序言の一句、*“Es irrt der Mensch solange er strebt.”*

とあつた。強い拍手が、続いた。実に感動的な一瞬だつた。私はその拍手の中に、今日まで教授の講義を聞いてきた神戸商業大学以来の全学生の拍手を直観した。

云うまでもなく、この「教授」こそ、宮田喜代蔵博士である。

II

宮田喜代蔵博士は、明治二十九年一月二三日岡山市に生れ、大正三年岡山県金川中学校を卒業、同年神戸高等商業学校に入学された。云うまでもなくこの年の七月第一次世界大戦が勃発した。はじめは、家業である呉服問屋に従われる筈であつた博士は、この年、坂西先生の講義に、「最初の時間から深い印象をうけ」、「経済学が真に学ぶに値する学である」ということをぼんやり乍ら心にきざまれた」ようである。「私が経済学を勉強しようと決心した原因の」と、かつて博士は云われた。「半分は坂西先生の御人格と明解な理論的解明であり、半分はマーシャルの問題提起であつた」と。予科時代に博士は、「唯物論というか宿命論というか、そんな思想にぶつかつてどうしても打開できないで悩んだものである」と懐古しておられるが、そんなとき、飯島幡司先生からM・スタイルナーの *Ego and his own* と、ペラミーの *Looking backward* を借りて読んでおられる。ただ「これら二つの書は当時の思想上の悩みを解決することに直接に役立たなかつた」ようではあるが。

予科時代に読まれたもので「特筆さるべきもの」としては、飯島先生の『社会問題の根本観念』と山縣憲一先生の『職工組合論』がある。博士は当時、「両先生の上述の書物をむさぼるように読み耽つた」。こうして、博士は「社会問題と思想史とに対して大きな興味を覚えることとなり、マーシャル原論によつて眼を開かれた社会問題への関心がいやがうえにも深められ」ることになつた。それがいかに重要な刺激であつたかは、一つは、「今日の私の思想的立場がこれによつて大

体方向を与えられているようである」という言葉により、もう一つは、これによつて、「学問で身を立てたい」という気持が確定したことを見ても判る。

本科三年、博士は宿願の坂西ゼミナールに入られた。かつて、博士は「三つのゼミナール」という文章の最初に、こうかいていられる。「学園は学びの種子のおろされ、それを培いあげる糧の与えられる園である。そしてゼミナールこそはこうした学びの園のいのちの泉である。その種子は師によつてひらかれる学びの心であり、この糧はそこにつどう学びの友によつて与えられる」と。この「いのちの泉」で、博士はどんなものを汲みとられたであろうか。博士の経済学上の業績に入る前に、いわゆる「三つのゼミナール」(神戸での坂西先生のゼミ、東京高商専攻部での福田徳三先生のゼミ、フライブルグ大学でのフッサール先生のゼミ)についてふれておくことは有意義であろう。

先ず第一に、博士にとつて、三つのゼミナールを泉とした三つの学園は、無上の園として受けとられていた。実際、当時経済学・商学の殿堂として最高のものであつた神戸高商と東京高商専攻部、それに伝統あるフライブルグ大学と並べてみると、博士がいかに確信にみちた生活を送られるのに値する環境で勉学されたかを推察できる気がする。

次に、学園のいのちの泉であつた三つのゼミナールはどうか。坂西先生のマーシャル講読で経済学を職業として研究しようと思われた博士は、坂西ゼミでは、アンウインの『一七世紀における産業組織』を勉強、卒業論文としてはブレンターノ『価値学説の発達』を邦訳された。そこで博士は、さきにマーシャル講読で得られた感銘を新たにされ、就中、坂西先生の「学問に対する、殊に史学に対する厳肅な態度」から、「ゆるがせにできぬ学問の心の構えを教えられた」と。とくに、卒論の作成に当つて、毎週坂西先生に原文と訳文とを読みあげて一字一句直してもらわれたことの感銘とマーシャル講読の明徹な理論的解明とは、博士の爾後の学究生活の隅々にまで徹していたようだ。私自身は坂西先生を知らない。しかし、博士が常日頃云われたり、書かれたものから推察すると、博士の講義、外書講読のあの論理的斉一性と明解さ、一字一句

をゆるがせにしないという態度とは、そこから生れたのではないかと思われる。かつて、北川一雄教授は「宮田先生の外書講読によつて、英語の先生よりも丹念に英文を読むことを教わつた」という主旨のことを云われ、また小島清教授も「経済学とは、こういう読み方、学び方をしなければならぬのかと皮膚に感じた」とのべていられるが、この最も基礎的なものの獲得、それこそ最初のゼミナールでの成果であるようだ。私はここまで書いて、ケインズを思い起す。すなわち、彼もケンブリッジでE・G・ムーアに絶対的に傾倒し、そこから多面的に、「合理的で科学的な態度」を学びとり、そこにその後の発展の一つの基礎を求めている。人間の成長にとつて、最初に感激するものが何であるかということは、きわめて重要であるようだが、その意味では、博士は、坂西先生の中から、博士の今日を導きだすのに十分な感激をもたれたようである。

博士は今日、これから経済学を始める人々に対して、必ず、経済史と経済学史とをしつかり勉強することを強調されるが、そのこともまた坂西ゼミナールで得られたものの一つであるように思われる。

東京高商専攻部では、福田徳三先生のゼミナールに入られた。福田徳三先生は衆知のように、「我國の経済学界の黎明期に當つて、先進国の諸学説を逸早く取入れて紹介された」。福田先生の特徴の一つは、「真理は極端にあり」という一句によつて象徴される。こうして博士も、「坂西先生の許におけるとは異つて東京では革新的理論と理論闘争との涼風のうちにて育てあげられた」。当時福田先生は、「戦時及び戦後の物価及び貨幣問題、殊に不換紙幣の始末と物価調節」という共通課題をとりあげ、ゼミナリストに分担研究させておられた。博士は、このうち、もつとも基本的な貨幣理論研究を分担された。福田先生は先ず、クナツプをすすめられ、間もなく、むしろベンディクセンから入るようすすめられた。この研究は、博士の数多い論文のうち最初の印刷されたものとなつた。「国民経済雑誌」大正九年二月号、三月号の「貨幣国定学説梗概」がそれである。こうして、学界活動の第一歩がはじまつた。それと同時にこの研究を通じて、従来博士の

「思想を支配していた個人主義的な経済観に対して新しく協同体的な経済観に眼を開かれた」ことは忘れてはならぬ。つづいて、クナップ、エルスター、リーフマン等、要するに、貨幣名目学説の研究が進められ、これは卒業論文となり、また博士申請論文の一編を構成することとなつた。また卒論と同時に提出された『クナップ貨幣固定学説』の邦訳は、福田先生によつて大正一一年、岩波書店から刊行された。云うなれば、神戸時代学びの心をかちえられた博士は、福田先生によつて、その心を更に拡げかつ深め乍ら、はつきりとした方向を確定された訳である。

博士の第三のゼミナールはフッサール先生のものであつた。博士はここで、「何等の特殊の科学を持たないで、純粹に哲学を基底としながら、その上に現象学的な考察をする事こそ豊かな稔りをむすびうるものだ」というフッサール先生の教えを身につけられた。博士が当該問題に関する過去の学説体系の研究を強調され乍ら公式論から入ることを嫌われる根拠の一つはこうしたところにもある。のちにふれるように、博士は「生活経済学」という名前の新しい稔りをもたれたが、この新しい稔りは、恐らくフッサール先生のもとの研究なしにはありえなかつたであろう。

宮田喜代蔵博士の研究成果をみる上で、忘れてはならぬ第三のものは、この三人の恩師によつてまかれた種子に、養いの糧を与えられたゼミの先輩友人である。神戸時代、既に坂本・八木両先生の参加によつて坂西ゼミでの生活を送られた博士は、福田ゼミでは、赤松要、大熊信行、梅田政勝の三教授と同級となり、とりわけ、赤松、大熊両博士とは、御退官の今日まで、学界でも稀にみる烈しい批判と鞭達の間をつくつてこられている。赤松要博士がその「自作年譜」の大正八年四月の項に、「専攻部の学生杉村広蔵、村松恒一郎、津田武二、宮田喜代蔵、大熊信行などと『純理の会』をつくり、盛んな討論を行う」と書いていられることをみても、また博士が『生活経済学研究』を出版されるに當つて、「本書の根本思想が、学問の友、赤松要教授、大熊信行教授、酒井正三郎教授との永年に汎る討議によつて培われた」とのべていられることをみても、その間の事情を知ることができよう。また、フッサール・ゼミにおいては、田辺元、山内得立、矢崎美盛

等の諸教授と交われ、就中、J・バック氏によつて、「現象学の経済学の領域における展開の方向としてゴットル学説を勉強する機会を見出し」ておられることは注目し値いする。またこうした烈しい論争的雰囲気は、逆説的なようであるが、博士が先輩・友人は云うに及ばず、後輩の意見、批判をも冷静に客観的に傾聴され、「学問の前進は、その体系が開放的であつて、閉鎖的でないことに依存する」という言葉になつて現われていると考えられる。私は博士ほど先輩・友人を大切にされる人を見たことは少ないが、それと同時に、博士ほどすぐれた先輩、友人をもつていられる人は少いことを痛感する。最後に、博士の経済学上の業績を見る上に、どうしても忘れられないものに、云うまでもなく、博士御自身の卓越した頭脳と、真に学者的な態度と生活とがある。ところが、そのことに言及するや否や、この卓越した師を、私の低さにまで下して表白してしまふ危険性を痛感する。幸い、博士は全く健康で、今日でもいろいろな活動を通じて、博士御自身をお示しになりつつある。私はこの点については、ここでは沈黙させて頂こう。

(註) 以上は、博士の三つの随想、即ち、「三つのゼミナール」(宮田ゼミ「Methode」創刊号、昭和二三年四月)「私の思想を育てたもの」(同上、二号、昭和二五年三月)「福田ゼミナールの想出」(宮田研究室「経済研究」第四号、昭和二七年一〇月)および平素のお話によつてゐる。

Ⅲ

それにしても、恩師宮田喜代蔵博士の、過去四十年に亘る経済学体系を大観することは、私のような非才には不可能に近い。ただ、このような機会を与えられた光栄にこたえるために、できる限りその全貌に接し度いと考へている。誤りや不満足の際は、博士は云うまでもなく、先輩諸兄の御寛恕をお願いしなければならぬ。

宮田喜代蔵博士の経済学への寄与は、およそ次の四つの分野に分けることができる。第一は、博士論文『貨幣経済の本

質に関する『生活経済学的研究』に代表される一連の理論経済学的研究であり、第二は、昭和九年の『平価切下論』にはじまり、戦後相次いで発表された平価切下論、通貨安定論等々に見られる第一の研究の現状分析への適用である。なお、のちにみるように、この第二の研究は、博士の数多い業績のなかでも、博士でなくてはできない労作を象徴する業績でもある。また第三のものとしては、昭和六年の『経営原理』にはじまり、昭和三二年の『企業と国民経済』に至るいわば産業経済学的な新しい領域の確立、ないし、企業および経営の生活経済学的研究という全く独自の業績があげられる。最後に、博士の研究の第四の分野は、経済政策論の分野であり、昭和二九年の『経済政策原理』はその原理的集大成でもある。また、以上のものと関連して、たえず、原理論に帰りつつなされてきた沢山の現状分析があるが、ここでは除外させて頂くことにしよう。以下そのうち、第一と第二のものについて概観してみよう。

博士の理論経済学的研究の本質的特徴は、衆知のように「生活経済学」という名によつて示される。しかし、上述のことからも判るように、生活経済学は一朝一夕にでき上つたのではない。われわれは既に、博士が坂西ゼミ時代に個人主義の精神（ちなみに、神戸高商学会誌の卒業記念号に博士は「自我意識の人」をかき、徹底した個人主義の考えをのべたといわれる）を学ばれ乍ら、福田ゼミ時代のベンディクセン、クナップ研究を通じて協同主義の思想をも把握されたことをみた。博士の生活経済学をみる上で、この思想的契機はやはり忘れてはならないものと思われる。博士はかつて、「ドイツに遊学の機会においてもリーフマン学説（教授の別の表現によるとそれは『徹底した個人主義の経済理論』と呼ばれている）を基調とし乍らゴットル教授の学説にふれ、人間共同生活の一部分構成としての経済の根本精神の思想を教えられた」とのべていられるが、たしかにこの思想の基調と生活経済学との結びつきは否定しえないと云つてよい。

博士が生活経済学と結びつかれたもう一つの契機は、上述したフッサール・ゼミでの研究であろう。現象学がゴットル学説に論理的にいかにして結びつくか、この問題は必ずしも自明ではない。しかし、先に引用した博士御自身の言葉から

も判るように、僚友であつたJ・バック氏の影響もあるうが、そこで博士が、「現象学の経済学の領域における展開の方向としてゴットル学説」をとりあげられたことは否定できない。しかし、ただここまでで止まるなら、博士はゴットル経済学の紹介者か、もしくは、単なる方法論者に止つていられたかもしれない。ところが、云うまでもなく、博士にとつて、現象学の研究は、具体的な経済現象の現象学的な考察によつて、経済学に豊かな稔りをむすぶためであつた。博士のその成果は、何よりも、『経営原理』(昭和六年)において稔つた。すなわち、そこで博士は、「生産経営及びその合理化の一般原理を、生活経済学の立場から取扱ひ」はじめて生活経済学の従来の理論経済学に対する操作、内容上の意義を浮び上げらせることに成功された。しかし、「ここに、生活経済学というのは、目的論的な見方に導かれた総合的・形態的な考察を特色とせるものであります」という言葉に端的に見られるように、今日のいみでのそれに比べると、きわめて機能的にとり扱われていることが判る。ゴットル研究の成果が最初に印刷されたのは、帰朝後間もない「ゴットルの生活経済学」(商学研究、第七巻第一号、昭和二年一〇月)であり、また論文「経済性と経営性」(経営学論集第二輯、株式会社制度、同文館刊、昭和三年四月)もこの一過程を示す。

しかし、独、米、英留学帰朝後、一、二の論文をのぞくと、昭和一二年頃までのほとんどの印刷された労作は、大正一五年三月の「リーファンの国富均等の思想」(国民経済雑誌)はじめ、「資本還元の理論」「消費理論の発展」等々主として、リーファマン研究を主軸とするものであつた。東京高商専攻部の卒論と一緒に提出されたリーファマン『原論』の邦訳が、昭和二年九月に出版されていることも決して無関係ではないと思われるが、マーシャルから入られた博士の研究上の一つの道程でもあつたと云えよう。もつとも、「リーファマン収益概念の批判」(一)(二)(国民経済雑誌、昭和四年一月号、二月号)でも明らかのように、その批判の見地は、副題に示されている如く「生活経済学の立場」より行なわれていることを忘れてはならぬ。すなわちリーファマンが経済的収益と技術的収益との区別を明らかにし、前者をことごとく純主観的

な価値評価から説明したことに一つの貢献を見出しつつも、一切の生産および技術的収益を経済学の埒外に放逐し、それによつて一切の技術を離れては把握しえない経済の正しい考察から離れてしまう点が批判されている。またこの研究を通じて、のちに、「生活経済価値序論」(福田徳三博士追悼論文集、経済学研究、昭和八年)で明確になつた生活余剰の考え方が生れていることも見逃してはならぬ。すなわち、リーフマンが経済的収益を、消費者の価値評価から導き出すのに対して、生産者としての費用評価と消費者としての利用評価の差として、別言すれば、生活経済的費用と生活利用との差としての生活余剰の概念がうちたてられたのであり、この「社会的生活余剰の綜体的最大要求を保障する条件の究明」に、余剰理論の課題が求められている。ただ、このような余剰、および費用価値が、リーフマン図式の発展としてではあれ、リーフマンの純主観的価値論から展開されてゆく限り、博士の余剰理論も主観主義経済学と運命を共にすることとなつたといふべく、博士自らも認めていられる博士の体系において分配論が明白に浮び上つていないのは、それと密接な関係をもつていと考えてよいのではなからうか。

博士の生活経済学への前進は、昭和五年七月の「経済科学の本質」(商業経済論叢)、「個別経済の形態的考察」(名古屋高商創立十周年記念論文集、昭和六年)を通じて益々明白になつたが、その最初の集大成は、何と云つても、『経営と経済との基本関係』(昭和十三年三月)である。本書は、昭和一二年九月より四回に亘り、財団法人金融研究会寄附講座として東大経済学部で講演されたものを出版されたものであり、のちに若干の加筆をされ『生活経済学研究』の上編に収められた。われわれはさきに、『経営原理』の段階では、生活経済学は、機能的に把握されていると云つた。ところが、この講演においては、この思想は発展した。前著との関係は博士自身明確に説明される。すなわち、「この間における思想発展の主要なもの一つは、企業および国民経済が生活への構成として出来た社会構成体であるという意味が顕著になつてきたことでもあります。これによつて、経営・企業・国民経済の基本関係が明かにされ、企業を中心とする今日の国民経済の構成が明

かに展望しうることになりました。もう一つの發展は、これと関連してかかる生活体構成の結果の正しさについての判断というものが新しく登場して来たことでもあります。これによつて前著で分析した技術と経済との基本的關係がさらに深い意味をもつようになるとともに、経済学が実践科学たりうる基礎が明かにされました」と。こうして、生活経済学の最初の体系化が成立した。『生活経済学研究』においては、更に、進展しつゝあつた戦時経済に対応した統制経済時代に、企業者の関心が自己の企業経営から、その所属する産業領域、さらに、国民経済全体での自己の地位の自覚を要請されてきたということから、経済学の性格がいかに変化すべきかを探索された。ここでは新たに、経営・企業と国民経済を結ぶものとしての産業部門の考察がひらけてきた。ただ、この当時「生活経済学」をゴットルの「生としての経済」と直接的に同一視する見解があつた。かくして博士は、その差異についてふれられることになつた（『生活経済学』の序参照）。中でも、われわれは、博士が経済学の三つの課題として、(1)「経済生活過程及び其の関連を確立し、之を敘述すること」、(2)「経済生活過程及びその関連の成立を、十分なる根拠から説明すること、」および(3)「経済生活過程をば共同生活の客観的目的に照らして判断すること、をあげられた点に注目したい。けだし、第一によつて、のちに博士の『経済原論』（同文館、昭和二八年）に示されるように、この体系は単なる形態学に終るのではなくて、あくまで経済現象の生活経済学になつたのであり、また、「ゴットルの認めざるところ」と云われる第三の国民経済学における全体的・目的論的考察によつて、実践科学としての経済学の認識が前面に浮び上ることとなつたからである。

博士の経済学研究が、クナップ、ベンディクセン等のいわゆる名目主義的貨幣理論の研究からはじめられたことは既に見た。ところが、それらに共通していた共同体的思想は、ゴットル研究を媒介とする生活経済学の深化に伴つて、博士の生活経済学体系のなかに恰好の位置づけをうることになつた。福田ゼミ以来の博士のこの面の考察は『貨幣論』（昭和一三年）を経て、益々明確になつてきた。昭和一五年七月『貨幣経済の本質に関する生活経済学的研究』（のち『貨幣の生活理

論』(昭和一六年二月)出版)によつて東京商科大学より経済学博士の学位を得られ、それと前後して、『貨幣理論』(新経済学全集、昭和一五年一〇月)が出版されたが、前者こそ博士の業績の集大成であることは云うまでもない。本文七〇八頁、三編に亘るこの老大な仕事の第一編では生活経済学の根本的立場と研究方法が、第二編では、貨幣名目学説の分析を通じて、貨幣経済の生活経済学的研究の生れ出る必然性とその問題の解決方向が、第三編では、積極的に生活経済学の立場から、今日の貨幣経済秩序の根本形態と、その中の経済生活の構成が究明され、それを通じて、貨幣理論と経済理論との統合がなされた。またここで、前著『生活経済学研究』でわれわれが指摘した生活経済学への指向は一步前進し、ここでははつきりと、「ゴットルの『生活としての経済』の理論の線に沿ひ乍ら、なお純粹理論を総合的に把握しうる生活理論」としての認識が明確に自覚されていることは、『経済原論』との結びつきにおいてとくに注目すべきことである。そのいみでは博士の生活経済学は、いわゆる純粹経済学の発展に伴い、それらを新しく構成的に位置づけるものとして、今後ますますその考察領域を拡大することになるであろう。博士論文がいかなる条件を具備すべきか。これについて淺学の私は云うべき資格をもたない。しかし坂西先生によつて、ゆるがせにできぬ学びの心と過去の経済学説の謙虚にして系統的な研究を身につけられ、更に福田先生によつて、「批判なき所に学問なし」という基本精神と革新的理論とを学びとられた博士のこの申請論文は、自らの革新的理論の方法の説明にはじまり、過去の経済学説の系統的な研究と批判によつて、それに代るべき現象分析の新しい成果の表明をもつて終るといふ形においても、博士論文の一つの典型的な形態を示されたことは否定できないと思われる。私は、ここまで書いてきて、博士がいかに二人の先生の教えを忠実に履行されたかに気づかざるをえない。博士は両先生を、心から敬愛しておられる。しかし、私の考えでは、このように、師の教えに忠実でありえた人だけが、本当に師のことを敬愛できるもののである。私は省みて、誠に恥かしい思いがする。

戦時経済の進展に伴い、博士の現象学的考察は、必然的にこの統制経済の新しい事態を解明することに向けられた。

『国家経済学の立場』(昭和一八年)はこの事態に対応したものである。しかし、この時期の主たる経済学的関心は、たんに「統制経済の形態的特質」(昭和一九年九月)にあるのではなくて、むしろその内容にあつた。博士がいち早く、ゼミナールにおいてランゲ等の計画経済論の研究を行われ(この研究のために、社会主義研究の疑いをうけ、ゼミナリストン及び博士自身蔵書調査等をうけられたことは有名なことである)、またとくに、「計画経済と経営操業度の原理」(「商業経済論叢」、昭和一六年一〇月、この論文は同年同月の日本経済学会大会でも報告された)、「経営規模の原理」(「国民経済雑誌」昭和一七年四月)等の究明を行われたことはこのことを示している。後者において博士は、最適規模(ここでは、各規模の経営が夫々平均生産費の極小点たる最適操業度で操業されることが前提されている)は経営規模と生産費との関係において純粹に経営的範疇であり、これに対して、最強規模および最有利規模は、生産費と共に需要面をも双面的に計慮してはじめて判断しうる経済的概念であることによつて両者を区別し、それらが資本主義の経営問題の解決に対してもつていゝる意味を明らかにされた。この研究は更に発展して、「企業規模・企業操業度の経済学的考察」(村本福松編『適正規模経営』国元書房、昭和二五年)、「産業構造の統制原理」(「企業経済研究年報」二号、昭和二七年)となつて結実し、のちに藻利教授等々との論争のきつかけをつくられることになつた。

こうしてみてくると、すぐ気づかれるように、博士の経済学研究のなかで、『経営原理』以来、企業経営に関する研究は非常に多い。元来、ゴットル学説の展開においては、基本的に二つの道があつた。一つは、経済と政治または人間共同生活との関係究明への道であり、もう一つは、経済と技術との関係究明への道である。勿論、生活としての経済を考える限り、この二つをきりはなすことはできない。しかし、博士の主たる関心は、この第二の方向に向けられた。そのことは『企業と国民経済』(経営学全集第十五巻)、東洋経済新報社、昭和三二年一月)に最も明白に示されている。すなわち、博士の生活経済学の本質的特徴は、国民共同生活—国家政治—経済(国民経済—企業)—経営—技術—外界自然を、その階

層的関連と機能的関連に従つて、双面的に、統轄と限定との関係において把握されることにあり、しかもその主たる関心が、このあとの方にあつた訳である。

政治—経済—技術の階層的解釈の上に立つ、それぞれの双面的解釈が、いかに生活経済学の構成の上に本質的な意味をもつかは、前記博士論文においても明白である。すなわち、博士は、売買取引の成立する過程、および売買経営の構成する過程は、技術的側面として、従つて、そこでの貨幣の職能たる一般的購買手段は技術的なものとして、また、企業及家政という個体経済及び国民経済の構成される過程は、経済的側面として、従つてそこでの貨幣職能たる一般的交換手段は経済的なものとして、両者の間における統轄と限定との相互関係が究明された。そして、この「階層的理論」によつてのみ、単に、貨幣論が、貨幣論に終るのではなく、貨幣経済理論になる根本的理由が明白にされたのである。そのいみでは、生活経済学とは、政治—経済—技術の階層的解釈の理論と見つけることも許されるだろう。博士の神戸大学での最後の講義に政治・経済・技術という言葉が黒板に大書されていたことは、従つて、決して偶然ではないのである。

しかし、不断に發展する博士の生活経済学体系を典型的に表現するものは、何と云つても『経済原論』（昭和二八年）である。これは、昭和二六年天理時報社で印刷された非売品の教科書（そのまえには、がり版刷りの教科書があつた）、をものにできた、戦時、戦後の博士の講義の集大成である。われわれはそこに、たんにそれが「経済原論」の講義であるからというのではなくて、生活経済学を「経済原論」としてはつきりと自認された博士の態度をも見出す。そのことは、第一編経済基礎論、第二編経済形態論として、博士の従前の生活経済学体系がのべられたあと、「経済原論の中心課題として」自覚された経済構成論が第三編に収められ、それが本書の主内容を構成していることを見ても判る。もつとも従前の生活経済学体系と云つても、その詳細をみると、いくつかの点において、新しい経済学体系の消化とその巧みな利用が見出される。筆の運びの拙いために、予定の枚数は既がない。そのすべてをあげることはできないことは誠に申訳ないが、その

一例は、第一編第三章「共同経済の根本問題」とか、第二編第四章「資本主義と社会主義」において見出しえよう。しかし、本書の構成において、最も苦心されたのは、何と云つても、第三編、就中、第二章であつて、そこにわれわれは、根本的にはマーシャル原論を基礎とし、その後の理論的發展を考慮しつつ展開された産業秩序、国民経済の構成論的分析の成果を見出すことができる。

IV

博士はかつて、神戸高商卒業論文の序に、「自分を生かし切る事だけが人類の進歩に貢献すると考えてゐる自分は、自分で初めて書けるものを書くのでなければ恥かしいと思います」と、書いたことを想起しておられる。生活経済学は正に博士自身を生かし切られた一つの分野であるが、この意味で博士のもう一つの真髓を示すものは、何と云つても「平価切下論」に関する一連の研究である。われわれはさきに、博士の福田ゼミナールでの研究が、「戦時及戦後の物価及貨幣問題・殊に不換紙幣の始末と物価調節」のうち、貨幣理論的研究をもつて始つたことを見た。しかし、博士にとつて貨幣理論の研究は、たんに貨幣理論自身として研究されたのではなくて、理論経済学の一分野として、別言すれば、国民経済を貨幣経済の面から経済学的に把握しようとして行われた。それと云うのも、第一次大戦中及び後の不換紙幣の始末と物価調節の経済学的分析が最初の課題であつたからである。その間の事情は、『平価切下の理論』(昭和二二年)の序文に明確にのべられている。すなわち、「在外研究三ヶ年及び爾後二十五年の間、私は理論経済学の根本問題より遡つて経済本質論を究めようとするとともに、他方これに基づいて貨幣経済本質論を、さらに貨幣価値変更の歴史的研究を進めて来た。研究の歩み遅々として進まず、ようやく先年生活経済学的研究の基礎のうへに『貨幣の生活理論』をまとめて、曾つて福田先生から与えられた研究課題の本質論的考察に対する一応の答へをなしたわけであつた。いまその基礎のうへに纏めた『平

『平価切下の理論』をもつて福田先生によつて最初与へられ、クナップ先生によつて示唆された貨幣価値変更問題に対して一部分ながらお応へせんとするものである。」と。

もつとも、それまで平価切下問題について、博士が沈黙しておられた訳ではない。大正一四年六月には「独逸の新本位制」(国民経済雑誌)について、また大正一五年二月には「ロシアに於ける一九二四年の本位改革」(商業経済論叢)についての研究等があり、昭和九年には既に、『平価切下論』が出版されている。一般に、金本位制の限界とその克服を説得した代表的な労作としては、J・M・ケインズ卿の『貨幣改革論』(一九二三年)が想起される。しかし、貨幣名目学説はたとえバクナップの『貨幣国定学説』に典型的に現われているように協同体的社会観の上に成立し、貨幣制度は国民経済生活のために存在するものであるとする。従つて、それは、もし社会的厚生のために必要なら、平価切下工作はいうまでもなく、金本位制そのものを修正すべきだとの見解を含むものであつた。(なお、この意味での金本位制の分析は、博士の『貨幣理論』第四編「本位制度論」に明白にされている)。博士の平価切下論がいち早くからその成果を結ぶことができた理由の一つはこの名目説の体得にある。その意味でも、平価切下工作のもつ経済学的意味を我が国で最初に全面的に把握できた人であると云つても過言ではなからう。本書は、「平価切下の理論」と「平価切下の実際」の二つの編から成り、平価切下の類型は基本的には、景気打開を目的とした貨幣価値引下策と、インフレ後始末たる貨幣価値安定策とに分類されて、夫々理論的実証的に研究されている。しかし、博士の平価切下問題の経済学的研究は何としても、生活経済学の体系化以後、従つて、前記『平価切下の理論』をまたねばならなかつた。本書は、前著の第一編に当るものであり、博士の平価切下問題研究の第一部をなす。ちなみに、第二部は「平価切下の歴史的研究」(これは前著の第二編に当るもの)第三部は「平価切下の学史的研究所」となる予定である。

博士の平価切下論のもつている根本的特徴は、「それが通貨工作としても技術的特徴を分析するに止まらず、それが本

位政策として生み出す経済的作用を了解し、さらにはかかる経済政策の採られた歴史的情勢を背景として社会的意味を判断ししようとされた点にある。博士は、平価切下問題を、その国家行政活動としての技術的操作のもつ事象関連から出發して考察し乍ら、それが流通経済の循環過程に対して及ぼす有機的作用という事態関連の了解へと進み、さらに国民経済の世界経済内的構成という究極的目的に対してもつ職能関連の判断によつてのみその分析が十全になると考えていられる。このような考察方法は、生活経済学によつて確定された一つの基本的な立場、すなわち、経済生活を、一面においてはこれを上位層から統轄する社会的、政治的要因を通じて、また他面これを下位層から限定する技術的制約を考究するという態度によつて保証されていることは云うまでもない。もし、前著『平価切下論』から『平価切下の理論』との間に、重要な変化があるとすれば、その一つは、この生活経済学の確立によつて確認された分析方法の前進ということであると云つて決して過言でない。また、このことが自覚された場合にのみ、『平価切下の理論』の展開に當つて、この研究を、『貨幣の生活理論』を序説とし、これに続く貨幣経済の特殊的研究』と呼ばれる理由が明白となる。

しかし、云うまでもなく、以上は分析方法に關することであつて、『平価切下の理論』の内容的特徴の一つは、インフレーションに關連して行われる平価切下工作、デフレーションに關連して行われる平価引上工作等要するに平価変更工作を、(1) インフレの後始末のための貨幣価値安定政策としての平価切下、(2) インフレの後始末のための貨幣価値引上政策としての旧平価不変工作、(3) インフレ誘発又は促進のための貨幣価値引下政策としての平価切下、(4) インフレの進展中、これを停止させるか、又は、デフレに逆転させるために行われる貨幣価値引上政策としての平価引上の四つの形態に分け、これを本来の平価切下である貨幣の金平価の切下とは全く異つた通貨工作としての貨幣通用価値切下げと區別して、(この通用価値切下の本質と類型の分析は第二編を構成する) 平価切下の本質と類型、その作用と影響とを上述の方法を駆使して詳細に明らかにされた点にある。その基礎的態度は次の一句に明白である。即ち、「現在の金平価を基軸として実現され

る金本位制の有機的作用に放任しておく限り、國際的不均衡を是正するために国内經濟の安定が不当に阻害される危険の存する場合には、この金平価を変更することが合理的である」と。ところでこのような理解は、単に金本位制の運用を合理化するという考えだけでは生れてこない。これは、上述したように、何よりも一方において、金本位制の社会的職能たる国民經濟の正しい構成というより上位の観点から、その職能的意味に照らして平価工作の作用方向を判断すると同時に、他方において、本位政策の經濟的機能に照応した平価工作の技術的操作方向とを双面的統一的に考察するという方法から生れるものである。事実、上述平価工作の四つの型を基礎として、二八の型態が組み立てられ、そのそれぞれについて、上記の分析方法が貫徹されている。いうまでもなく、このような分析は我が国は云うまでもなく、世界に類のない、独自のすぐれた研究である。

私はこの機会に一つのことを付け加えておきたい。本書は、『平価切下論』が日本評論社の新經濟全集の一巻として出版された縁もあり、同社から出版される手筈であつた。ところが、博士は昭和二二年という出版事情の困難な時を考慮して同社のためにむしろ出版を断念されていた。ところが、「名古屋高等商業学校卒業の諸卿の心を一にしての協力」と「多くの犠牲を払つてこれを引受けられた黎明書房」とによつて出版された。考えてみれば、序論に当る『貨幣の生活理論』は名古屋時代の産物であり、またその上に展開さるべくしてなされた特殊的研究としての本書も、こうして名古屋高商卒業生諸卿とくしき機縁を結んでいた。学びの園としての神戸・東京・フライブルグについてはさきにふれた。私はこの一事によつて、とりあえず博士の研究歴上での名古屋を象徴しておきたいと思う。

『平価切下の理論』のあと、ひきつづいて当該問題に関する多くの著書論文が出版された。著書だけでも『インフレーションと平価切下』(昭和二二年)、『通貨改革と平価切下』(昭和二三年)、『通貨安定論』(昭和二四年)、『デフレーション』(昭和二五年)等がある。しかし、前二者と最後のものは、あるいみでは、啓蒙に力点をおかれたものであり、第三の『通貨

安定論』も、より高い意味ではあるが、ドイツ安定政策に対応して、通貨安定の原理と類型を明らかにすることによつて、通貨工作に対する解説と不安を除去することに力点がおかれていたと云つてよい。

その意味で、この問題における博士の分析上の前進は、むしろ、「インフレーションと通貨改革」(国民経済雑誌、昭和三一年一月)において見られる。すなわち、博士の平価切下論は『理論』の参考文献でも判るように、もつぱら第二次大戦前の文献を基礎としていた。ところが、ここでは、新たにB・ハンセンのインフレ分析やオイケンの戦後の研究が考慮されその結果インフレーションは開放的及び抑圧的の二つに分類され、その上にインフレ収束の通貨措置が考察されることになつた。博士はさきに、「戦争インフレーションの歴史―第一次大戦の実証的研究―」(『国際経済研究』年報1、昭和二六年三月)において、第一次大戦のインフレーションの三つの時期と三つの型(旧平価で解禁した戦後デフレ国、金平価切下をした中規模インフレ国、更に金平価切下と称呼価値切下をした超インフレ国)を分け、その分析を行なわれた。ところが、三一年一月の論文では、金平価切下、為替平価切下、通用価値切下、称呼価値切下の四つの通貨改革が前記のインフレの二つの型との関連において、取扱われた。その結果、開放型の場合インフレが小規模なものでない限りは、安定的平価切下が、大規模な場合は同時に称呼価値切下が、また抑圧型のさいは、積極的通用価値切下がなされるべきことが明らかにされた。(同様な分析は、Kobe University Economic Review, 1, 1955. の論文 "Concept and Types of Devaluation." に既に見られる)

博士は、昨年ドイツ社会政策学会に出席され、そこでの共通論題「恒常的経済成長のための財政・本位政策的条件」の研究討論に参加、同時に各地で本位問題に関してドイツの代表的な人々と意見の交換をし、また戦後の新しい資料を入手して帰国された。そのいみでは、全く適当な時に、適当な学会に出席された訳である。博士は、今後「平価切下の歴史的研究」と「平価切下の学史的研究」とを、前著の第二部・第三部として完成しようとしていられる。私はその日が一日も

早く、それによつて、この分野における世界の研究に金字塔のたてられることを期待してやまない。

V

以上、私は、博士の経済学での業績を、四つの分野に分けて考察する積りで筆をとり乍ら、事実上、二つの分野に止つてしまつた。この二つの分野についても、決して十分で、正当な扱いをしていないにも拘らず、また、それに対する私自身の考えをのべることもなしに、既に予定の枚数をこえた。もつとも、幸いにして、この二つの分野は、博士を象徴する分野ではあるが、私は、誤りと不十分さを更に大きくしないために、残りについては別に機会をあらためて筆をとる方がよいと考えた。

それにしても、神戸大学教授宮田喜代蔵博士は、いま神戸大学名誉教授となられた。それが、神戸大学経済学部にとつて、いかなる事態関連と意味関連をもつか、これは恐らく時間の経過と共に明らかにされることであらう。私自身について云えば、博士の三人の先生と、沢山の先輩・学友のいぶきの強く感じられたあの研究室で、教えて頂く日のないことが何よりも淋しいことである。しかし、博士は去年ドイツからお帰りになつて以来全く御健康であり、御退官後も、関西学院大学商学部教授として、私自身にとつては、今迄と何の変わりもない「先生」として教えを頂けることを無上の喜びとしている。先日、経済学部僚友会の席上、先生は御退官の御挨拶のあと、静かに歌つて、席につかれた。それは西条八十の有名な「かなりや」であつた。私は、今迄に少くとも、三、四回位聞いたように思う。私は、それを聞いたたびに、うたを忘れたような生活をしている自分自身を省みて、身のひきしまる思いがする。思いおこすと、先生を行政の府にすえようとする試みが少くとも三回はあつた。その度に断つてこられた先生が、いま、一生を学問の道に捧げてこられたことによる喜びをどんなにしみじみとかみしめていられるか、私には判るような気がする。

最後に、私の拙い文からも判つて頂いたように、先生が経済学で身を立たたいと思われた一つの決定的な理由は、マールシャルの問題提起を契機として、先生を育てあげてきた思想であるようだ。最近熊谷尚夫教授が、経済学研究におけるこのことの重要性をとりあげ、理論経済学から終局に期待するものは、まとまつた経済学的世界像であるとのべていられる。宮田喜代蔵先生の経済学への執着も、個人主義から協同主義へと進んだ独自の経済学的世界像であるようだ。先生は好んで、「乗り越えて進む」という言葉を口にされる。われわれも、そこから、それを乗り越えて進まねばならないようだ。もつとも、その場合、ゲーテの次の言葉が私の頭から離れない。「弟子は師をこえることによつてのみ師に近づく」というのがそれである。これは大変なことである。(一九五九・四・三)

執筆者紹介 (執筆順)

- 中山伊知郎……一橋大学教授 経済学博士
北野熊喜男……神戸大学経済学部教授 経済学博士
家本秀太郎……神戸大学経済学部教授 経済学博士
置塩信雄……神戸大学経済学部助教授
中村一雄……神戸大学経済学部講師
新野幸次郎……神戸大学経済学部助教授

本号の編集には特別委員の外、特に家本教授の御協力を煩わした。(編集委員)